

努力する才能

福島県西郷村立西郷第二中学校

三年 佐藤 壮 真

自分にはやはり才能がないのか。僕は嘆いていた。自分なりに懸命に努力しているはず。なのに、なかなか成長しない、努力が、なかなか報われない、そんな自分に悩んでいた時期があった。

僕は、小学校四年生の時に今住んでいるところに転校してきて、その時から長距離を走り始めた。陸上の経験がなく、はじめは体力づくりのつもりでやっていた。しかしだんだん走るのに慣れてきて、ロードレースなどに向けて、家で父や妹とともに練習を重ねるといった競技スポーツとしての陸上をやるようになっていった。

練習をやっていく中で、先に才能を発揮したのは妹の方だった。妹は、小学校一年生の頃から、学校行事の持久走記録会で男子と並ぶほど速く、女の子の中では断トツの一位だった。妹は、僕より三歳年下で、もちろん女子である。しかし、僕が小学校四年生、五年生、走り始めて一、二年（妹は小学一、二年生）の頃は、僕と妹の走りの速さはそこまで変わらなかった。僕も妹と同じような練習をしているのに、なぜ自分だけ伸びないのだろうと思っていた。そう思う理由はほかにもあった。ロードレース大会では、妹と比べて全くいい順位は取れないし、学校

の持久走記録会だって普段走っていないような男子に負けてしまうことも多々あった。僕のモチベーションは下がっていくばかりだった。僕には才能がないのか。僕は走りには向いていないのだろうか。何度も悩んだ。そういった嘆きは、レースがあるたびに積み重なり、走るのをやめようと思つた。

しかし、そんな僕を変えた言葉がある。それは、こうやって悩んでいた僕を励ましてくれた父の言葉だ。父は、嘆いた僕に、こんな言葉をかけてくれた。それは「努力できるのも才能だ」という言葉だった。この言葉を聞いて、自分は大切なことに気付かされた。自分は才能がないと思つていた。周りばかりを見ていて、自分自身を見ていなかった。自分は、人よりも劣つていてモチベーションが下がりがながらも、自分なりに努力して、少しずつではあるが自分を高めることができていたのだ。こうやって努力するのは、普通の人ではできなくて、やはり才能のある人にしかできない。だから君には「努力する才能」がある。このようなことを父は伝えてくれたのだ。僕は、自分にも才能があるのだと分かり、気持ち軽くなるのを感じた。周りばかりを気にしすぎて気が付かなかつたが、自分にも努力する才能があったのだ。

そうやって自信を取り戻しながら走りの練習をしていくうちに、だんだんと実力が伴うようになってきた。小学校六年生の時の持久走記録会ではバスケットボールチームの速い友達には負けたものの、学年で四番目に入った。それでもやはりロードレース大会では速い人たちがまだまだいて、モチベーションが下がることもあったが、それでも成長した自分を夢見て、懸命に練習をした。

そして、中学二年生になった自分は、駅伝チームに入って西郷村の代表として「ふくしま駅伝」に出

場した。チームでの厳しい練習を乗り越えて代表にまで選ばれたのは、自分に努力する才能があったからであり、それを気付かせてくれた父のおかげでもある。そして、僕を陰で支えてくれた母やコーチのおかげでもある。さらに、僕に刺激を与えてくれたライバルや先輩、そして妹のおかげでもある。

頑張っているのになかなか報われない、そんなときは、「自分はそれでも頑張れているのだ」と考えて、僕はいつでも懸命に練習をしている。その背景には、家族やコーチ、ライバルたちの応援や支えがある。それらに対する感謝を忘れずに、僕を支えてくれた人たちにいつか恩返しできるような、さらには、彼らに興奮と感動を与えられるような、そんな走りができるようになるまで、僕は走り続けるつもりである。僕の挑戦は、まだスタートを切ったばかりだ。